Himalaya; plants are 4.5-5.2 mm wide×3-4 cm long, pale greenish brown; the leaves are remote or loosely imbricate, and the dorsal lobes 1.2-1.3 mm wide ×1.0-1.2 mm long and the ventral lobes 1.8-2.3 mm wide×2.0-2.4 mm long; the teeth on leaf-margins are mostly unicellular (but sometimes 2-3-celled at the basal margin of ventral leaf-lobes), and 15-18×30-55 μ (2.0-3.1 times as long as wide); the leaf-cells are 15-23×15-25 μ at middle portion, with medium sized, triangular, acute trigones; the gemmae are very rare, on the apices of leaves near shoot apex, 2-celled, pale brown, 20-25×13-16 μ.

引用文献　服部新佐・井上浩：谷川岳の苔類，特に山頂部の蛇紋岩植生について，服部植研報 **21**：85～103 (1959)。　井上浩：Studies on Formosan Hepaticae, I. Introduction and Scapaniaceae. Jap. Journ. Bot. **20**: 311-327. 1972.

(国立科学博物館植物研究部)

□ HANSEN, C.: **The Asiatic Species of *Osbeckia*** (Melastomataceae), GINKGOANA No. 4, 150 pp., 20 pls., Academia Scientific Book Inc., Tokyo, 1977 ¥5000. 著者はコペンハーゲン大学の Botanical Museum に属し，このヒメノボタン属の研究はデンマークの東南アジア植物研究の一翼をなすものである。まず特徴となる形質の簡単な説明に続いて，2種類の検索表が示される。一つは目立った形質を目安として種または種の小グループへ直接到達するもの，もう一つは通常のタイプのものである。次に各論に入り，種，変種ごとに同じスタイルの記述が続く，文献の引用は原記載の出典以外は省かれている。その代り異名についてその基準標本がいちいち引用されている。英文の記相文と著者の見解がのべられ，その後に参照したすべての標本のデータがリストされ，また分布図がつけられている。分類上の大きな異動はなく，変種レベルで3つの新名と7つの新組合せが行なわれている。巻末に学名の索引と共に Collector 別の標本の索引がある。新見解を盛った本というよりも，基本データを多く盛り込んだ参考文献である。それにしては引用標本のリストはみな追込みになっていて見にくい。編集の邪魔扱いのような感じだが，小さい活字は経済上やむを得ないとしても，もう少し見易い形式に組んだ方が利用に便利と思う。　(金井弘夫)

□ 湯浅浩史：**さし木・つぎ木の楽しみ方**　新書版 pp. 159, pls. 4, 池田書店，東京 ¥480 (昭和52年 VII)。さし木，接木，取木の方法と楽しみ方を各見開きの片ページに図解した本で，内容は従来のものをうまく処理しているが，特に科間接木として中心子目とサボテン科，それにタデ科とは接木ができるが，ナデシコ科は不可能だとする点は著者の系統追求の実例としてまことに興味がある。　(前川文夫)